

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2015年2月5日放送

「第39回日本化粧品学会 会頭講演より

期待される化粧品とは？～研究室から夢をめざそう～

東海大学 皮膚科
教授 小澤 明

日本化粧品学会とは

本日は、2014年6月5日、6日の2日間に開催された第39回日本化粧品学会についてご報告します¹⁾。まず、はじめに、「日本化粧品学会」について、簡単にご紹介させていただきます。

「日本化粧品学会」は、その目的を、会則第2章に「化粧品分野における研究成果を発表し、もって化粧品科学の進歩向上に寄与すること」と明記しています。2014年4月1日現在、皮膚科学、薬学、化粧品学などの研究者、正会員627名からなり、年1回の年次大会、年4回の学会誌の発刊を軸に活動しています。

そこで、第39回年次大会を開催するにあたり、次回が節目の第40回 記念年次大会を控えていることから、もう一度現点に戻り、「日本化粧品学会」とは、何のための学会、誰のための学会、そして、そのゴールは何なのかを考えてみました。

その歴史を紐解くと^{2,3)}、学会活動の軸は、戦後の日本の歴史とともに、動いて来たことがよくわかります(図1¹⁾)。すなわち、女性の権利拡大という時代背景のもとに、化粧品産業が飛躍的に拡大してきたものの、それに伴う、「化粧品公害」が問題ともなりました。それゆえ、その

学会活動の軸は、戦後の日本の歴史とともに、動いてきた。

女性の権利拡大
化粧品業界の飛躍的拡大

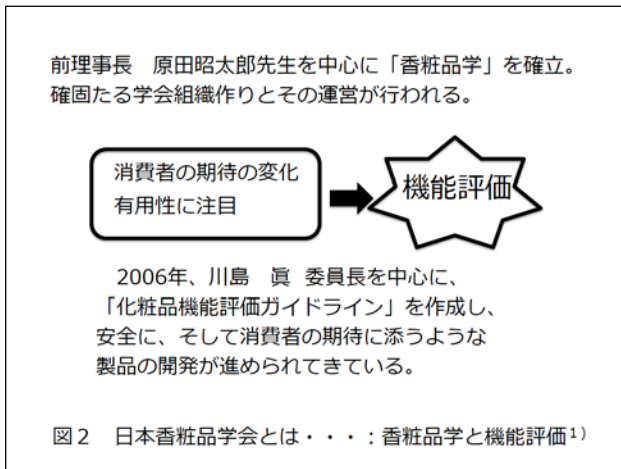
化粧品公害

安全性を第一とし、科学的根拠に基づくべく、
化粧品について、皮膚科学、薬学、化粧品業界の
専門家による検討ができる組織作り、学会運営を。

図1 「日本化粧品学会」とは・・・：化粧品公害¹⁾

安全性を第一とし、科学的根拠に基づくべく皮膚科学、薬学、化粧品業界の専門家による検討ができる組織作りが、安田利顕先生、高瀬吉雄先生、細田文一郎氏らにより始まりました。

その後、その目的に沿って、多くの先輩のご尽力により、その活動が発展、原田昭太郎 前理事長を中心として、「化粧品学」を確立し、確固たる学会組織作りと学会運営が行われるようになりました(図2¹⁾)。さらに、時代は進み、消費者の期待は、その有用性を期待する時代となり、「機能評価」という概念が生まれ⁴⁾、2006年には、当時のガイドライン作成委員会委員長 川島眞 現理事長を中心に、安全性、機能評価ガイドラインが作成され⁵⁾、その期待に応えるべき学会の対応がなされてきました。



このような経緯を振り返ってみれば、「日本化粧品学会」とは、「何のための学会、誰のための学会、そして、そのゴールは何か？」の一つの答えが見えてきたように思えます。すなわち、「化粧品機能評価法ガイドライン」の巻頭にも、「化粧品科学の役割は化粧品に対する消費者の期待に沿うことにあり…」と⁴⁾、明確に示されていることを理解すれば、私が持った疑問の答えは、『「期待される化粧品」を、安全に、そして消費者の期待に沿うような、有用な製品の開発を、それに携わる研究者により科学的知見に基づき真摯に行うこと』となるのではないのでしょうか。

第39回日本化粧品学会のテーマ

では、「期待される化粧品」とは何なのでしょう？この第39回年次大会では、まずは、「期待される化粧品」とは何かを、各化粧品会社のトップに語ってもらおうと考えました。それこそ、その研究開発に携わる若手の研究者にとって、大きな目標にもなるし、インセンティブにもなるでしょう。しかし、この企画は大会運営委員会で、あえなく、即、却下されてしまいました。

それなら、「第39回日本化粧品学会」では、是非、「期待される化粧品」を目指して、「～研究室から夢をめざそう～」をテーマとし、次世代に向けての「化粧品」の研究開発を推進し、若手研究者が斬新な研究を組み立てるのに、少しでも役に立つような企画を試みてみようと考えました。

第39回日本化粧品学会のコンセプト

そこで、以下の3つの企画を考えました。

<企画1>

会員の研究発表に重点を置き、発表はすべて口頭としました。年次大会は、会員の優れた

研究発表と討論を行い、絶えることのない研究意欲の高揚をもたらし、そして、たゆまぬ努力の総決算と考えます。そこで、より充実した討論ができるように、本大会の講演抄録集は、その書式を、「背景」、「目的」、「方法」、「結果」、そして「結論・考案」のように統一しました。その結果、34題もの研究発表があり、研究者として研鑽された成果を、自分の言葉で、しっかりと報告し、会員間での実りある討論が出来ました。

<企画2>

昨今の研究活動の環境はかなり厳しいものもあります。そこで、「安心・信頼の更なる向上を目指して」、会員が研究者として、いっそうの活躍ができるような環境、問題点などを考えてみたいと、2つの特別講演と1つのシンポジウムを企画しました。すなわち、順天堂大学医学部皮膚科の池田志孝教授に「iPS細胞などの各種幹細胞を用いた皮膚再生医療の現状と問題」を、同志社大学の中谷内一也先生には、「信頼の心理学」についての特別講演をお願いしました。また、シンポジウムとして「化粧品の新安心・信頼を追求するための新しい視点」というテーマのもとに、4題の講演、「動物実験の基本的考え方と関連法規などについて」を東海大学医学部基礎医学系分子生命科学の秦野伸二教授に、「化粧品における最近の健康被害例と課題」を藤田保健衛生大学医学部皮膚科の松永佳世子教授に、「化粧品の安全性評価における *in silico* の活用」を資生堂リサーチセンターの上月裕一氏に、そして、「最近の薬事行政について」を厚生労働省医薬食品局審査管理課の井上隆弘課長補佐をお願いしました。それらの講演とともに、本音の質問、ディスカッションをしていただきました。それにより、「～研究室から夢をめざそう～」を、会員に実現してほしいと切望した企画意図は十分果たせたと考えています。

<企画3>

「学会を楽しもう」ということを念頭に入れ、種々の企画、仕掛けを考えました(図3¹⁾)。勉強の合間には、心身ともにリフレッシュしながら、学会を楽しんでいただけたと信じています。商業展示スペースを、1つのフロアにまとめ、各展示企業の案内をプログラムに掲載しました。そして、その展示スペースでは、学会場のモニタリングスクリーンおよび無線LANを設置し、また、従来の飲み物だけではなく、江戸の懐かしいお菓子なども用意し、意見交換もできるテーブル、椅子も準備しました。さらに、「帝国製薬」のご好意により、本年次大会の記念の千社札(図3¹⁾)をプリントできるコーナーを設けました。学会の合間に、ご自分で、ご自分だけの記念の千社札をお作りいただき、

学会を楽しもう!

- 1. 展示スペース (11F)**
 - ・ モニタリング・スクリーン
 - ・ 無線LAN
 - ・ 飲み物、江戸菓子
 - ・ テーブル、椅子
 - ・ 大会記念千社札
- 2. 会場周辺の情報**
 - ・ 「ぐるなび」ランチMAP
 - ・ 喫煙場所情報
- 3. 懇親会**
 - ・ 6月5日(木)
 - ・ 銀座東武ホテル
 - ・ 新潟の銘酒の飲み比べ
 - ・ The Professors
 - ・ ~Cosmetic Special 2014~

図3 第39回 日本化粧品学会：学会を楽しもう¹⁾

実に 600 枚を超える千社札記念シールが作成されました。また、「ぐるなび」の提供による、学会周辺の「昼食マップ」を受付で配布して、安くて、おいしいお店を探して、銀座でのランチを楽しんでいただくようにしました。愛煙家の会員には、会場周辺の喫煙場所情報も用意しました。一方、懇親会では、第 37 回日本化粧品学会会頭の新潟大学医学部皮膚科学教室の伊藤雅章教授から、新潟の銘酒、25 本もの差し入れを頂き、会員の懇親に大いに役立ちました。さらには、サプライズイベントとして、「The Professors～Cosmetic Special 2014～」と称した本年次大会に関する皮膚科教授によるバンド演奏が、賑々しく、楽しく行われました。

第 39 回日本化粧品学会の成果、意義

以上のような背景、企画意図、学会概要で、「第 39 回日本化粧品学会」を運営させていただき、563 名の参加がありました。果たして、会員の評価はいかようだったのでしょうか？「第 39 回日本化粧品学会」での種々の新しい試みは、「日本化粧品学会」の、そして、その年次大会での、次への飛躍のために、必ず役立つものと確信しています。

謝辞

なお、「第 39 回日本化粧品学会」については、学会誌である「日本化粧品学会誌」に掲載されていますので、是非ご一読いただければ幸いです。また、「第 39 回日本化粧品学会」は、言うまでもなく、関係各位のご理解、ご支援のもとに開催できたこと、心より感謝しています。とくに、本大会では、今までにない種々の企画、運営があり、理事長、執行部、大会運営委員会とそのタスクホースを務められた理事、評議員の皆様、そして藤原延規副会頭、学会事務局には、無理、難題をお願いしたにも拘らず、お忙しい中を多大のご尽力を頂き、いずれの企画も大成功でした。この場をお借りし、心より感謝します。

そして、2015 年 6 月 18 日、19 日に開催される第 40 回記念年次大会には、是非、一人でも多くの皮膚科医の参加をお願いします。

文献

- 1) 小澤 明：期待される化粧品とは？～研究室から夢をめざそう～、日本化粧品学会誌、38：158-165、2014
- 2) 能崎章輔：学会の設立と化粧品学会への衣替え、日本香料化粧品学会誌、37：299-302、2013
- 3) 安田利顕：創刊にあたり、日本化粧品学会誌、1：1、1977
- 4) 原田昭太郎：ガイドライン発刊によせて、日本化粧品学会誌、30：311、2006
- 5) 川島 眞：化粧品機能評価法ガイドライン（2006 年）、日本化粧品学会ホームページ(<http://www.jcss.jp/journal/guideline.html>)